

研究主題「社会的なものの見方や考え方を育てる指導の工夫

～児童の自己評価力を高めることを通して～

東京都教職員研修センター 研修部 現職研修課

羽村市立栄小学校 教諭 濱辺 理佐子

研究のねらい

小学校学習指導要領解説によると、社会的事象の意味や働きを主体的に追究する力を育てるために、知識を網羅的に覚える社会科から、観察・調査、体験、表現などの具体的な活動を通して、自ら調べて考える力を育てる社会科への授業改善をしていくことが求められている。社会的事象の意味や働きを主体的に追究する力を育てるためには、児童の社会的なものの見方や考え方を育成することが必要である。

児童の社会的なものの見方や考え方を育成するためには、教材・教具の工夫、資料提示の工夫、評価の工夫等、様々な工夫が考えられる。こうした工夫の中から、本研究では評価の工夫に焦点を当て、児童の自己評価力を高める指導の工夫を行うことにした。

そこで、社会的なものの見方や考え方を身に付けたかということを確認するための自己評価の場を社会科学習の中に設けた。そして、児童が自分の学習状況を正確に振り返り、自己評価の妥当性を認識することができる指導を行い、そのことによって、社会科の学習のねらいを達成させることにした。このような学習を繰り返すより、児童に社会的なものの見方や考え方を身に付けさせることができると考えた。

研究の内容と方法

1 基礎研究

- (1) 教育審議会答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方」(平成12年12月)、文献から、評価における課題を明らかにした。
- (2) 文献や教育課程実施調査(平成13年度)から、小学校社会科において、社会的なものの見方や考え方を育成することについての課題を明らかにした。
- (3) 文献や先行研究から、自己評価を活用した実践事例を分析した。

2 調査研究

検証授業を行う学年の児童(小学校第5学年34名)を対象にしたアンケート調査を検証授業の前後に実施した。調査により、児童が学習を進める際に感じた困難や成就感に関する経験等、児童の実態を把握し、検証授業を進める際の指導に活用した。

3 授業研究

自己評価力を高める工夫を取り入れた指導計画を作成し、小学校第5学年を対象にした検証授業を行った。

- (1) 小学校第5学年「わたしたちの生活と工業生産」について、教材と単元構成を検討した。
- (2) 児童に自己評価をさせる方法として自己評価カードを作成した。自己評価の妥当性を認識させる手段として、自己評価カードには、児童にとっても自分の変容が見られるように工夫を加えた。
- (3) 児童による自己評価と教師による評価を比較し、児童が判断した自己評価の妥当性を児童に返していくことで、児童の自己評価力を高める授業を展開した。
- (4) 検証授業の前後に行ったアンケート調査から単元を通して変容した児童の実態を

明らかにするとともに、検証授業の分析によって児童の自己評価力を高める指導法の有効性を考察した。

研究の結果と考察

1 指導内容・方法の開発

(1) 自己評価の観点の明示

児童が社会的なものの見方や考え方について自己評価するためには、児童自身が自己評価する内容を理解しなければならない。そのために、教師は、児童が自己評価する内容を明確に示す必要がある。それによって、各時間の学習のねらいや自己評価力を高めるための指導内容・方法も明確になる。そこで、小学校学習指導要領解説社会編や先行研究及び文献等から考察し、児童の社会的なものの見方や考え方を育成するための自己評価の観点を設定した(表 1)。この自己評価の観点は、児童の考えの内容について振り返ることができるようにしたので、評価規準の 4 観点のうち「社会的な思考・判断」に重点を置いて作成した。実際の指導では、児童の実態を踏まえ、児童が自己評価できるよう自己評価の観点や内容の提示の仕方を工夫した。

自己評価の観点(表 1)

事象をありのままにとらえている
事象と事象を比較し、類似点や相違点を考えたり、相互の関連を考えたりしている
事象と自分との関係について考えている
事象を時間的・空間的な構造の中で考えている
特色・仕組み・働き・工夫・努力などから、事象の意味や一般性・特殊性を考えている
事象を総合的に考えて公正に判断している

(2) 自己評価の内容を明確にした指導計画の工夫

学習のねらいを達成させるために、各時間の学習活動に児童が自己評価する内容を明確にした指導計画を工夫し、学習活動に自己評価の場を設定した。そのため、児童が、各時間の自己評価の内容に示されている学習を達成しているかどうかを適切に判断できるように、自分の考えを確認しながら学習を進めることができる学習活動を多く取り入れた。例えば、他の児童の意見を聞くことによって自分の考えを確かめることができるように、小グループによる話し合いを取り入れたり、既習の学習を手がかりにして考えることができるように、既習の学習を想起させる活動を設けたりした。

(3) 自己評価カードの開発

カードの内容

児童が自己評価カードから自分自身の変容を視覚的にもとらえることができるよう、2 つの工夫をした。第 1 に、レーダーチャートで自己評価の得点を表すことにより、比較的短時間で記入することができ、レーダーチャートの形の変化を客観的に観察できるようにした。レーダーチャートのチェック項目は、自己評価の観点(表 1)を児童に分かりやすい言葉で置き換えて設定した。第 2 に、学習内容のまとめりごとに 1 枚の紙の中で数時間分を記入することにより、単元を通して児童の実態の変容が見られるようにした。

カードの活用方法

このカードは、単元を通して活用し、毎時間の学習の終わりに 1 単位時間の自分の学習状況を振り返り、その時間の成果と課題について確認した。そして、教師が児童の考えや調べ方のよさ、次の学習に向けての課題をカードに記入して次の学習に向けての方向付けを行った。

児童が行った自己評価と教師の評価とを比べて違いが見られる場合には、教師による評価

を付け加えその理由を記入することにより、児童は、もう一度自分自身の学習状況を振り返ったり、自分に対する評価の仕方を見直したりして、自己評価の妥当性を認識した。こうした支援の積み重ねが、児童の自己評価力が高まることに結び付いていると考える。

2 調査と検証授業の分析

児童が自己評価を行うことの効果として、自ら問題解決しようとする学習に対する意欲をもつようになることと、見通しをもって学習するようになることを予想した。調査の結果、この2つの効果が現れた。そこで、この効果が現れた児童の中から各1名の児童を抽出し、学習状況を分析することによって、自己評価の有効性を検証した。

(1) A児の学習状況(自ら問題解決しようとする学習に対する意欲をもつようになった児童)

第4時の学習状況

第4時の身の回りの輸入品について調べる学習では、自分の持ち物を調べたことで本時の学習が十分にできたと判断し、全て良いという自己評価をした。

そこで、服や文房具以外にも身の回りには輸入品があることに気付かせようと、調べ方を自己評価カードに記入した。また、観点の調べた事柄を比較・関連させて考察することも十分ではなかったので、工業製品の種類と国とを関連付けて考えることも記入した。

第5時の学習状況

第5時では、家だけでなく、近所のお店で調べたことも活用して学習した。A児は、教師の助言をヒントにして自分で調べ方を工夫し、自ら課題を解決するための方法を考えるようになった。

また、第4時の学習が十分でなかったことに気付いたA児は、第5時の学習で輸入品と輸入先を関連付けて考え始めた。その課題が解決できたことから、A児は、観点とについて達成することができたが、観点については、まだ十分ではないと自分の学習状況を振り返って判断した。

第6時以降の学習状況

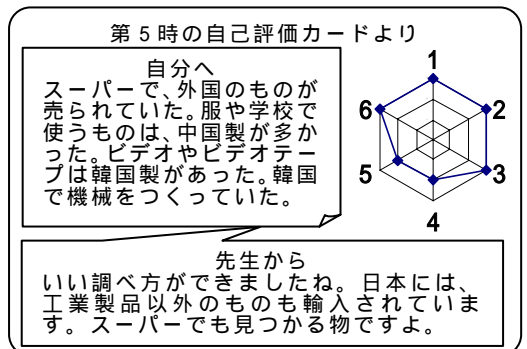
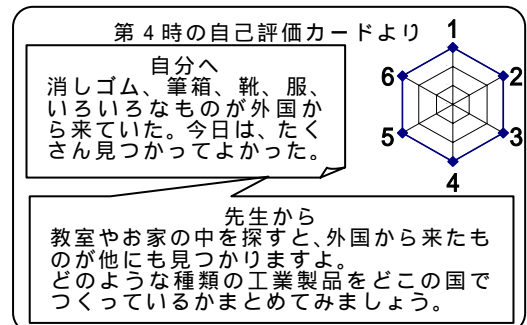
その後の学習で、いつも良いという自己評価をしていたA児であったが、学習状況に関心をもつようになり、自分の課題を見いだして学習するようになったことにより、評価に近付いた自己評価をするようになった。そして、教師の助言や他の児童のアドバイスを参考にしながら進んで学習するようになった。A児は、自己評価をしながら学習状況を自覚し、課題を解決していく過程で、社会的なものの見方や考え方を身に付けていくことができた。

(2) B児の学習状況(見通しをもって学習するようになった児童)

第1時の学習状況

第1時の学習中のB児の様子や自己評価カードから、B児は、資料を読み取ることに困難を

A児の実態	前	学習が困難な状況になると意欲が薄れ、自分の学習状況に対する関心が低かった。そのため、自分の課題を見付けられず、自己評価ができなかった。
	後	教師から助言を受けたり、他の児童のアドバイスを頼りにしたりして、徐々に自分の力で解決していこうとする姿が見られ、学習に対する意欲が高まっていった。



感じているということ把握した。そこで、課題に気付かせるために資料を見る視点を自己評価カードに記入した。

B児の実態	前	1単位時間の中で、自分がやるべきことを見付けられず、自分で学習を進められなかった。
	後	次の学習でやることを自覚し、見通しをもって学習を進めるようになった。

第2時の学習状況

前時に自己評価カードによる教師からの支援を受けて、B児は、資料の数値を比較して見た。その結果、日本は、機械工業が盛んであることを理解し、工業製品の輸送方法も比べて考えることができた。B児は、観点の事象を比較させて考察するという社会的なものの見方や考え方に気付くようになった。しかし、関連させて考察することが十分ではなかったため、観点の評価を高めるための課題を自己評価カードに記入し、次時の学習の方向付けをした。

第1時の自己評価カードより

自分へ
僕たちの生活は、たくさんの機械に支えられていた。

先生から
1970年と2000年の機械の生産額を比べて、生産額は増えていますが、減っていますか、調べてみましょう。

第3時の学習

前時の自己評価カードによる教師からの支援を受けて、B児は、様々な事象と関連付けて考えた。そして、なぜ自動車は船で運ぶのかという理由について考えることができた。

第2時の自己評価カードより

自分へ
機械工業が盛んになっていくことが分かった。船と自動車を比べた。船で運ぶのが多いと思ったけど、高速道路を使って自動車で運ぶことが多かった。

友達から
飛行機や貨物列車も比べると、もっと分かるよ。

先生から
比べると、たくさん見つけられますね。今度は、運ぶ物や運ぶ所とつなげて考えてみましょう。

B児に対しては、観点の力を育成するための支援を繰り返し行った。その結果、B児は、社会的事象を比較・関連させて考察することができるようになり、B児自身もできるようになったことを自覚した。また、観点の力を育成することにより、他の観点の力も伸ばすことができた。B児が社会的なものの見方や考え方を身に付けていった背景には、評価に近付いて自己評価できるようになったということが考えられる。B児は、自己評価力を高めたことにより、社会的なものの見方や考え方を身に付けた。

第3時の自己評価カードより

自動車は重いし、たくさん外国に運ばなければならぬから船で運ぶ。大工場と比べると小工場は、数が多いけど生産額が少なかった。

友達から
4年生で行った黒板工場も、専門の技術を使って勉強に役立つものをつくっていたね。

先生から
小工場で作られているものも、生活に必要なものですね。

(3) 考察

本単元の学習は、社会的なものの見方や考え方に関する学習状況について、繰り返し自己評価した。その結果、A児やB児の例のように学習上の課題を解決し、学習のねらいに近づくことができた児童が多くいた。このことから、社会科学習の中に自己評価の観点を明示した学習活動を設定し、自己評価カードを活用しながら繰り返し自己評価させ、教師の評価に近付かせる支援を行うことにより、児童の社会的なものの見方や考え方を育てることができたと考えられる。従って、社会的なものの見方や考え方を育成する上で、児童の自己評価力を高める指導を行うことは、有効であったことが明らかとなった。

今後の課題

社会的なものの見方や考え方の育成を目指した自己評価活動を工夫し、他の学年や単元においても、自己評価活動を取り入れた学習活動について検討していく。